

《書 評》

T. D. Barnes, *Ammianus Marcellinus and
the Representation of Historical Reality*,

Pp.xiv + 290, (Cornell Studies in Classical Philology 56),
Cornell University Press, Ithaca and London, 1998.

井 上 文 則

辞典でアンミアヌスという項目を引いて、次のような解説がされているのをみたら、読者はどう思われるであろうか。

アンミアヌス・マルケリヌス

アンミアヌスは、フェニキアのテュロス、あるいはシドンの出身。父親は、349年に東方軍総監 (Comes Orientis) であったマルケリヌス。この出自の故にアンミアヌスは若くしてプロテクトル・ドメスティキというエリート部隊に入り、ガリアからメソポタミアまで転戦した。アンミアヌスは、前途有望な士官であったが（実際、同様の境遇で経歴をスタートした人物が三人も皇帝にまでなっている）、プロテクトルとして仕えたウルシキヌスが失脚したことで経歴に傷が付き、さらにユリアヌス帝の下でキリスト教を棄教したため、同帝の没後、完全に失脚してしまった。『歴史』全36巻を書いたとき、アンミアヌスは失意の人であった。現在、丁度その半分に当たる18巻が残存している。その史書は、トゥキディデスやポリュビオス等のギリシア史学の系譜の中に位置づけられるべきものであり、実際、著者の教養も言語もギリシアのそれであった。史書の末尾で、自らをギリシア人 (Graecus) と呼んだのは、異教徒であることの宣言であり、史書の随所にキリスト教に対する偏見と悪意をみてとることができる。エウナピウスの影響を受け、ローマ帝国衰亡の原因をキリスト教に求めている。史書と言うよりも、imaginative literature である。

とんでもない解説だと思われるであろう。我々の持っているアンミアヌス理解と全く違っている。続いてこちらの解説を読んでいただきたい。

アンミアヌス・マルケリヌス

アンミアヌスは、シリア、アンティオキアの人。330年頃、クリアレス（都市参事会員）

階層の家に生まれ、長じては、コンスタンティウス帝、ユリアヌス帝に軍人として仕え、メソポタミアからガリアまで転戦した。363年、アンミアヌス自身が同行したユリアヌス帝のペルシア遠征が失敗に終わった後、郷里に戻っていたが、378年頃からローマで『歴史』全31巻をラテン語で執筆した。タキトゥスに続く最後にして最大のラテン史家。扱う範囲は、96年のネルヴァ帝の即位から378年のアドリアノーブルにおけるヴァレンス帝の敗北とその余波にまで及んだ。だが、残念なことに、『歴史』は著者自身の同時代史を扱った部分を除いて失われてしまっている。現存18巻。アンミアヌスは異教徒であったにもかかわらず、キリスト教に公正な態度で臨んでおり、また自身にとっての「英雄」であったユリアヌス帝に対しても批判的な立場を保持するなど、その史書の客観性は高く評価される。ギボンはこの史家に惜しめない讃辞を贈った。「さて、ここで心から遺憾とする一事は、ややもすれば同時代人の見解が陥る偏見や感情により歪曲されることなく、著者自身の同時代史をもっとも正確かつ誠実な筆をもって伝えてくれている道案内的人物と、いよいよここで別れを告げねばならぬことである（『ローマ帝国衰亡史IV』中野好夫訳、筑摩書房、1985年、242-243頁）」と。

いうまでもなく、後者の解説が通説的理解として、ギボン以来、概ね近年に至るまで引き継がれている。特に、マシューズは、1989年にアンミアヌスに関する608頁にも及ぶ大作を著し、伝統的アンミアヌス像を支持した（J. Matthews, *The Roman Empire of Ammianus*, Baltimore, 1989）。だが、このような伝統的アンミアヌス像を完全に覆し、前者の一見とんでもない主張をしているのが本書なのである。著者は、R. サイムの弟子の一人で、現在はトロント大学教授のT. D. バーンズ。The Sources of the *Historia Augusta*, 1978, *Constantine and Eusebius*, 1981, *The New Empire of Diocletian and Constantine*, 1982, *Athanasius and Constantius*, 1993等、多くの論著で我が国でもよく知られる、後期ローマ帝国史研究の第一人者である。

本書は、本論15章、補論10章からなる。まず、第1章、第2章は、概ねアンミアヌス評価の学説史で、続く第3章から第5章で史書の構成上の問題点が取り上げられている。第6章から第9章では、アンミアヌスの出身地や社会的出自、教養等が扱われ、第10章から第13章で、『歴史』の登場人物がアンミアヌスによってどのように描かれているのかが論じられている。そして、第14章でアンミアヌスのローマ史理解が明らかにされ、第15章ではアンミアヌスとタキトゥス、19世紀の史家マコーリーが比較される。補論は、アンミアヌスのテキストの問題に始まり、その他、例えばヴァレンス帝の動向についての研究などが取り扱われ、アンミアヌス研究にとって有益な基礎的データがいろいろ集成されている。これらの考察から導き出された結論を集約すれば、概ね上で辞書的に書いたようなことになるが、著しく通説と異なる点があったことは、直ちに気づかれるであろう。紙片の都合もあるので、主要な論点を三点に絞ってもう少し内容に立ち入った紹介をしておきたい。

まず、出身地の問題。アンミアヌスは、通説的には、シリア・アンティオキアの人とされているが、その第一の根拠は、ローマに住む同郷人マルケリヌスなる人物に宛てられたアンティオキアの弁論家リバニウスによる一通の書簡である。だが、バーンズはこの書簡の内容分析から宛先のマルケリヌスなる人物が歴史家アンミアヌス・マルケリヌスと同一人物ではないことを主張する。したがって、アンミアヌスをアンティオキア出身とする積極的な根拠は失われることになる。さらに、アンミアヌスとその史書のなかでテュロスやシドン等の都市を讃えていること、またテュロスに地所を持っていたヘルクラヌスという軍人と旧知の間柄であったと考えられることから、アンミアヌスの出身地が、フェニキアの都市であったと推定されるのである。この結論は、アンミアヌスの非アンティオキア出身を説く近年の傾向(C. Fornara, G. W. Bowersock)をさらに強く押し進めたものである。なお、アンミアヌスが軍高官の息子であったという主張は、19世紀の学説の再論である。これに付言しておく、バーンズのアンミアヌス研究の一つの柱となっているのは、19世紀から20世紀初頭にかけてのドイツ(Wilhelmine Germany)の学説の再評価である。

続いて史書の巻数。なぜ全31巻ではなく、全36巻なのか。既にみたように、アンミアヌスの史書は96年以降の292年間の歴史を全31巻で扱っていたが、第14巻の途中からしか残存していない。そして、その第14巻は353年の出来事を扱っている。ということは、アンミアヌスは後半の18巻で僅か25年間の出来事を詳述しているのであり、したがって、アンミアヌスは叙述のスケールをそれ以前のどこかで相当転換したのであると考えざるをえなくなる。この史書のアンバランスな構成の謎を解く仮説は、従来二通り提案されてきたが、バーンズはそのいずれの仮説も否定し、全く新しい仮説を提案する。まず、バーンズは、第3章で、古代の書物が何巻かごとブロックに分けられるシンメトリー的構成を持っていたことを論じた上で、アンミアヌスの史書もそのようなシンメトリーを持った構成(アンミアヌスの場合は6巻ごとあるいは3巻ごと)であったはずであり、元来は31巻ではなく、36巻から成っていたのであると推定する。伝えられている巻数は誤っているのであり、実は、現在残っているのは史書全体の丁度半分である。そして、このように想定することで、353年以前の時代にも十分なスペースが確保できるというのである。バーンズの仮説は非常に興味深く、かつまた大胆なものであるが、無理に巻数を5巻増やすことが、問題の本質的な解決に繋がっているのかどうかは疑問である。

最後に、アンミアヌスとキリスト教の関係。バーンズは、第8章で、アンミアヌスが意識的にキリスト教を無視している一方で、キリスト教の用語や価値意識を十分に知っていたことが随所に窺えると論じ、アンミアヌスが単なる異教徒ではなく、ユリアヌス帝と同じく背教者であった可能性を示唆する。また、アンミアヌスが陰に陽にキリスト教を非難し、貶めようとしていることをテキストの分析から指摘している。さらに、第10章から第13章では、アンミアヌスが、自身の好悪の感情、とりわけキリスト教に対する敵意から人物像をゆがめているとする。そして、第14章で、バーンズは、アンミアヌスがローマ帝国衰亡の原因を

キリスト教に求めていたとする注目すべき見解を提示するのである。アンミアヌスは、31. 5. 11-17. で、ローマは強欲や柔弱な生活や贅沢によって「古の健全さ *sobria vetustas*」を失ってしまったと記しているが、バーンズによれば、この箇所ではアンミアヌスが言わんとするところは、コンスタンティヌス帝の改宗以降、ローマはキリスト教が内在する悪徳によって衰えていったというところにある。エウナピウスは異教の祭儀がコンスタンティヌスの改宗以降等閑にされたことがローマ衰亡の原因であると説いたが、バーンズはアンミアヌスが「いっそうの知的洗練さをもって」同様の主張をしていると論じる。その史書の最後の6巻は、アドリアノープルの大敗北以降のローマ帝国の弱体化がキリスト教によってもたらされた墮落によって引き起こされたものであるということを複雑かつ巧みに論証しようとしているという。

アンミアヌスがこのようなキリスト教観を抱いていたとする主張の可否を、ここで直ちに判断することは私にはできないのであるが、ただ、この問題に関連して本書の相当部分に当てはまる問題点を一つ指摘しておきたい。バーンズは、このような結論をアンミアヌスが「書いていない」ことを他史料から見つけ出し、そしてそれがアンミアヌスの意図的な無視であると指摘し、さらにその理由を探るという手法で引き出してきたのであるが、問題はその前提としてあらかじめ「客観的な」歴史像が設定されているということにある。具体的には、バーンズが自身のアタナシウス研究の過程で明らかにした4世紀のローマ帝国像、そこではキリスト教が様々な面において中心的役割を果たしていたのであるが、それがその「客観的な」歴史的現実とされているのである。結局、バーンズに言わせれば、自身の描いたキリスト教的世界が「正しい」歴史的現実であり、したがって、それと大きく食い違うアンミアヌスは、その「正しい」歴史的現実を、自身の好悪の感情から徹底的にミスプレゼンテーションしているということになる。ここには、歴史に一つの客観的な歴史的現実を認めるのかどうかという歴史学全体に関わる問題があることは考えねばならないだろう。さて、確かに、バーンズのこの研究は、アンミアヌスの伝統的評価を大きく揺るがしており、その意味で本書はアンミアヌス研究を行う際の不可欠な文献となっていくに違いない。だが、今後必要なことは、バーンズのように一方的にアンミアヌスを一定の歴史像を用いて切り捨ててのではなく、より積極的にアンミアヌスの描いた世界をどう評価するのかを考えていくことであろう。

最後に私事になるけれども、軍人皇帝時代を専門としてきた評者が、自身専門からやや離れた本書のような書物を読むことになったのは、本書発刊の年に来日されたピーター・ブラウン教授のお薦めによるものであった。軍人皇帝時代に興味があることをお話ししながら、京都御所を観光案内していたときに、なにかご推薦の本はありませんか、とお尋ねしたところ、教授が挙げられたのが本書であった。情けないことであるが、その時、マルセリナスが誰のことか分からなくて、何度も聞き返したのを今でもはっきりと覚えている。